校長室だより

R6.11.5　Vol.26

常識や偏見に捉われない生き方

前号で紹介した書籍には↑こんな生き方指南があったように思います。突然ですが、ここでクイズをひとつ!

○ あるお父さんが助手席に息子を連れてドライブ中、事故に遭った。2人は重傷を負い、救急車で近くの病院に運ばれた。その病院の医師が手術室に運ばれてきた子供の方に目をやり、「なんてことだ!この子は私の息子だ!」とつぶやいた。さて医師まで男の子のことを息子といったのはなぜなのだろう?

これで頭をひねってしまうようなら、もしかすると自分が持つ常識や偏見に心が捉われているかもしれません。(私は頭をひねりました。汗) 自分の中で、「あ!」と答えがひらめいたとき、気をつけないといつの間にか偏見に捉われているんだなあと反省しました。

大島クルージング

公民館の方々にお世話になり、大島クルージングに出かけました。私は 1～4年生と行動を共にしました。フィールドワークで簡単に大島の説明をした後、海岸で自由時間としました。

水切りを見せてやると、練習し始める子供もちらほら。「3段いきました！」「5段いきました！僕の最高新記録です！」と目を輝かせる子もいました。4年学担の先生は「私、水切りできないんです！」と言っていましたが、しばらくすると「校長先生！2段いきました！」とこれまた目を輝かせながら報告してくれました。(笑) 貝殻集めをする子。栗があったと嬉しそうに言ってくる子。靴を濡らしながら、海水を集める子。それぞれに大島を満喫していたようです。

四方山話真穴 ver.　其の二十六(なぜ殺してはいけないのか？)

教育機関関係の方と少しお話をする機会がありました。雑談の中である書籍の話になりました。おばあちゃんのことが大好きな少年の話です。「僕が死ぬとおばあちゃんは悲しむに違いない。だから僕がおばあちゃんを殺してあげよう。」幸いにもそのおばあさんは軽傷で済んだそうですが、少年の認知の歪みから生じた悲しい事件の話でした。思考が短絡的というより恐怖を感じるほどです。

「なぜそういう行動になるのか？生来、殺すことはいけないことだという本能を人間は持っていないのでしょうか？」そうその方に問うてみました。「生まれてからの様々な関わりや学習、教育、経験、そんな機会を通して学んでいくことだと思いますね。」そう答えていただきました。

私が初めて人の死に出会ったのは小学校1年生の時。祖父の死でした。すごく私のことを可愛がってくれた祖父でした。具合が悪くなり、寝ている祖父をしばらく見ていました。ある日、学校から帰ると母に「じいちゃん亡くなったけん、静かにしときなさいよ。」そう言われました。1年生の私でも、家の中の雰囲気が一変していることを感じました。葬式の日のことも鮮明に覚えています。父が涙を流しながら「苦労かけたな…。」そう言って棺桶に釘を打ち、蓋を閉じていました。もちろん私も悲しい気持ちでいっぱいでしたが、人が亡くなるということがどれだけ大きなことなのか、当然、言葉にはできませんでしたが、肌で感じていたように思います。おそらくですが、そんな経験の積み重ねが命の大切さであったり、それはかけがえのないものであるという意識であったり、そんな感覚・感性を育んでいくのでしょう。

核家族化であったり、コロナ禍の3年間であったり、人や周りの環境との関わりが希薄になってきています。自宅での看取りが病院での看取りへ、家での葬式が当たり前だった時代から、セレモニーホールが当たり前の時代へと、今は、死が遠ざかる社会です。生活様式や環境は当然変化していきますが、変化させてはいけないものについてはしっかり体験、教育、躾をしていくことは忘れてはならないことだと強く思います。